

久留島武彦の朝鮮口演 その一

金, 成妍

九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/11029>

出版情報 : 九大日文. 10, pp.2-19, 2007-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :



久留島武彦の朝鮮口演 その一

金成妍

一 はじめに

日本口演童話の創始者として認められている巖谷小波が、初めて口演童話を試みたのは一八九六(明治二九)年のことであつた^①。小波の『我が五十年』^②によると、二七歳の頃、京都に旅行した時、ある小学校校長から「是非私の学校に来てお伽噺をして下さい」と依頼を受けたという。「しかし私はお伽噺を書く事は書いていたが、その時までは未だ、一度もお伽噺の口演と云ふものをしたことがなかつたので、その事を話した処が『いや貴下のお伽噺は皆生徒が面白がつて読んでいるのですから、それを实地に口演して下さい』と云うので遂に」最初の口演童話を試みたのが端緒である。その後一八九八(明治三二)年、小波は大日本婦人教育会の依頼に応じて家庭講演及び口演童話をを行うこととなり、毎月一回、学習院女学部及び幼稚園の生徒の前に立った。

一九〇〇(明治三三)年九月、ドイツのベルリン大学附属東洋語学校へ講師として渡欧した小波は、一九〇二(明治三五年)一月に帰国、再び『少年世界』の主筆につく。そして、その翌

一九〇三(明治三〇)年には、日清戦争に従軍した際『少年世界』に尾上新兵衛の筆名で寄稿した軍事物で一躍有名となつた久留島武彦が「お話の会」を開催した。一九〇三(明治三〇)年七月一日、横浜蓬萊町のメソジスト教会を会場にして、久留島の長年の念願であつた、子どものための文化事業という夢の実現に向けた最初の試みである「お話の会」が開催された。これは、後に全国的な「お伽倶楽部」の運動へと発展していく、その出発点となつた記念すべき催しの日でもあつた。この会には、久留島の師である小波と久留島の近衛兵時代の親友である木戸忠太郎が話し手としてかけつけた。

その後、久留島が日露戦争に招集されることによつて、「お話の会」は中断を余儀なくされた。一九〇四(明治三七年)二月仁川に上陸してから、一年八ヶ月の間朝鮮半島に滞在した久留島は、一九〇五(明治三八)年一月に帰還する。さつそく「お話の会」の準備に着手し、「お伽倶楽部」を結成、一九〇六(明治三九年)三月一七日、神田美土代町の青年会館で「お伽講話会」を開催するが、プログラムは童話だけでなく童謡や手品などを織り込んだものであつた。この「お伽講話会」は毎月一回、七年間も継続された。

この時期、博文館は、日露戦争が終局となり戦争関係の雑誌及び図書の発行が下火になつたため、各雑誌の全面的な再編成に乗り出した。従来男子を主とした『少年世界』に対して、専ら少女の伴侶となる『少女世界』を創刊、小波の監督の下、海賀篤麿が主任として新たに加わつた。久留島によつて開催され

た「お伽講話会」が大成功をおさめると、博文館はそれを見逃さず、『少年世界』と『少女世界』の宣伝に「お伽講話会」を取り入れた。すなわち、講話部を新しく設置して地方愛読者のための巡回お伽講演会を企画したのである。一九〇六(明治三九年九月、博文館はさつそく久留島を講話部の主任として迎えた^③)。そこから小波と久留島二人による本格的な口演童話活動が展開される。小波と久留島によって明治期に基礎が出来た口演童話は、大正期に入つていよいよ活発な発展をみせた。主要都市に「お伽倶楽部」の支部が結成され、「お伽周遊列車」「夏季臨海学校」「瀬戸内海の子供の船」「草鞋云」が開催されるなど、全国的にお伽倶楽部の運動が盛んになった。「童話界の三大家」と呼ばれる巖谷小波、久留島武彦、岸辺福雄の三人を中心とした口演の傾向は、下位春吉らの「大塚童話会」、松美佐雄の「日本童話連盟」、芦谷重常の「日本童話協会」などの童話会創立に波及し、語りの専門家が続出するようになった。^④『日本口演童話史』は、「一九一八(大正七年頃)から「お伽噺」は「童話」と呼びかえられるようになって、童話口演は益々盛んになり、各地に童話研究会ができ、全国の師範学校にはほとんど童話研究室が持たれて話す童話の研究をやり、各地の児童文化団体主催の童話大会が日曜ごとに開かれ、当時「童話」と言えば読む童話ではなく話す童話のことを指したものであった」^⑤と記す。一大ブームを巻き起こしながら広まった口演童話の勢力は、当時日本の統治下に置かれた朝鮮^⑥にまで及ぶものであった。しかし、朝鮮において日本人が行った児童文化活動に関する研

究は、皆無に等しい現状にある。言語の問題をはじめ、一次資料の乏しき及び資料収集の困難性などが原因となり、調査研究を阻んできたのである。そこで、筆者は植民地期朝鮮で刊行されていた『京城日報』と『毎日申報』、『朝鮮日報』と『東亜日報』を基本資料として取り上げ、一九一〇(明治四三年)から一九四五(昭和二〇)年までの記事を一枚ずつ捲り、日本人によって行われた児童文化活動に関連する記事及び児童文芸物をデータ化する作業を重ねてきた。その結果、「植民地期、朝鮮における日本人の口演童話活動年譜」なるものを完成することが出来た。調査結果によると、巖谷小波、久留島武彦、大井冷光、沖野岩三郎、野口雨情、日比性賢、深瀬薫、小池長、佐田至弘、安倍季雄が日本統治下に置かれた朝鮮半島を訪れ、朝鮮の子どもに口演童話を行っていたことが判明した。

小波の朝鮮口演活動に関しては、すでに『九大日文』四号から八号にかけて稿を起こしたことがある。本稿からは、久留島の朝鮮口演について述べていきたい。朝鮮における久留島の活動に関する先行研究は皆無である。前回の『九大日文』九号を借りて、口演活動が介入される以前の久留島と朝鮮との接点に関する考察を試みた。本稿では、久留島が一〇年ぶりに朝鮮に渡り、初めて朝鮮に暮らす子ども達の前で口演を試みた一九一〇年代を中心に述べたい。朝鮮に「児童」が認識され、「児童解放」と共に「児童文学」が主唱されるようになるのは一九二〇年代以降のことである。「韓国における最初の本格的な児童雑誌」^⑦と評価され、「近代児童文学の始発点」^⑧とされる『才

リニ』が創刊されたのは、一九二二(大正一二年)三月二〇日であつた。すなわち、久留島が朝鮮で初口演を試みた一九一〇年代とは、児童に対する認識及び児童文芸が芽生えるすぐ手前に置かれていた時期だつたとも言える。久留島の朝鮮口演を通して、朝鮮に児童文芸という花がひらくまでの経路を概観していくことにする。

二 家庭博覧会に來た久留島武彦

朝鮮半島における日本人による初の口演童話は、一九一三(大正二年)、巖谷小波によつて行われた。一九一三(大正二年)九月二十九日から同年一〇月三〇日までの、一ヶ月余りにわたる満鮮旅行に出かけた小波は、一〇月二日から三〇日までの一〇日間朝鮮に滞在し、口演を試みた(『九大日文』五号参照)。満州口演については、「恰もシャートルの子供に『団子』が分らなかつたと同じやうに、満州の子供——眼界の狭隘なる聴衆に対しては、遂に私のお伽噺は失敗したのである」⁽⁸⁾と語る一方、朝鮮口演については、「東京に於いてすると、殆んど同様な反響があるように思われた」と述べ、日本語を使つた口演がうまく通じたことに感心し、朝鮮での口演を成功と評価していた。

初の朝鮮口演旅行を終えた小波が日本に帰つた後、朝鮮総督府は大きな企画に向けて動き出す。それは、「始政五年記念朝鮮物産共進会」(以下共進会と表記)を開催するための動きであつた。この共進会は一九一〇(明治四三年)以後五年間の植民統治

の成果を広報することが目的であつた。新旧施政を比較対照する方法を通して、朝鮮人には日本がいかに優れているかということを理解させ、内地人には植民地開拓の必要性と実相を見せることによって安定的な植民地統治の踏み台を得ることを試みるものであつた。

一九一三(大正二年)年から計画された共進会は、一九一四(大正三年)三月、第三一回帝國議會で経費予算の協賛をうけ、準備に着手した。同年六月二十九日、総督府の訓令によつて「共進会事務章程」を公布、八月三日、共進会評議員に関する規定を定めた。これに従つて本会の事務総長、事務委員長、事務委員を配置、出品を審査するために審査長、審査部長、審査員を、共進会に関する重要事項を審議するために評議員を配置した。事務総長は朝鮮総督府の政務總監であつた山縣伊三郎が引き受け、その他は総督府の職員から総督が任命するか他の部署から嘱託を任命した。事務委員は数回にわたつて会同し共進会に関する諸般の規例、陳列館やその他の建物の配置、営繕工事方針及びその他の必要な事項を定め、同年八月六日に総督府の告示で、一九一五(大正四年)九月一日から同年一〇月三十一日まで共進会を京城府の景福宮内で開催することを明らかにした。

朝鮮総督府が主催した共進会は、民間企業の商業用ではなく、各道の次元で行われた物産中心の展示行事でもなく、「始政一」を記念したものであつた。すなわち、総督府としては始政記念行事を通して朝鮮統治の成果を対内外に誇示する必要があつた。この時、どれ程たくさんの人が共進会を観覧したかという

問題は、総督府に対する大衆の支持を間接的に表すのみならず、博覧会の成敗を左右する尺度という点において何よりも重要な問題となった。観覧客を誘致するために各種の組織が召集された。地方行政組織の場合、府尹・郡守・道長官らは、出品・観覧・団体視察・旅行宿泊などの便宜を図るために施設を揃えるように命じられた。出品勧誘と受付過程に地方行政が関与し、出品者は府尹または郡守と道長官を通して共進会に申請するようにした。また、民間協賛会が積極的に参加しないと産業発達に障害となることを強調し、各府・道に組織された総二八ヶ所の民間協賛会を活用して基金を募集した。協賛会を中心に、府・那別の競争を誘導、行政組織を通して団体観覧を積極的に組織した結果、観覧者は一〇〇万名を超えた。『毎日申報』一九一五年八月二二日の報道によると、一〇月三十一日の閉幕当日まで観覧客は総一、一六四、三八三名と公式集計された。

大衆動員に積極的な役割を果たした言論機関には、総督府の機関紙である『毎日申報』と『京城日報』の二つの新聞、そして同じく総督府の機関誌である月刊雑誌『朝鮮彙報』がある。『毎日申報』(一九一五年八月三十一日)は共進会が開催される六〇日間、六〇万部を大増刷して内地・朝鮮・満州・台湾に配布し、朝鮮の現状や共進会の状況を知らせていくことを公表する。また『朝鮮彙報』は、共進会を特集にした『朝鮮彙報始政五年共進会記念号』(『朝鮮彙報』七号、朝鮮総督府編、一九一五年九月一日)を発刊した。これらの機関誌は、展示館の詳細な紹介と毎日の出来事、入場客数などを重点的に報道、総督府の宣伝機関とし

ての任務を如実に果たしていた。さらに『京城日報』と『毎日申報』は、共進会の開催と共に「健全な国家・健全な家庭」というモットーで家庭博覧会を企画した。一九一五年(大正四年)七月一七日『毎日申報』には、次のような広告が掲載され、家庭博覧会の開催を知らせている。

家庭博覧会、会場、大平通京城日報社

九月十一日から十月卅一日

家庭博覧会とは家庭に関する諸般事物を蒐集した最も実用的であり最も娯楽的であり且つ最も革新的な博覧会である。各家庭の諸位が団欒に一日を快楽に過ごす高尚な娯遊場所となると同時に一家の主婦及家族各位に精神的、実用的、経済的な利益を無限に供給する場所である。同期間に開催する始政五年記念朝鮮物産共進会の盛況に加担ことを願ひ、主催両社は如斯理想下に全力を挙げて着々準備中。
主催 毎日申報社 京城日報社

同年八月二一日、同紙には「家庭博覧会役員及賛助員」の名前が発表された。それによると、名誉総裁・李埈公殿下、名誉副総裁・吉原三郎、市原盛宏、名誉会長・趙重応、名誉副会長・原田金之祐、韓相龍が就任し、名誉顧問には李完用、朴齋純、金允植などの名が、監督には徳富猪一郎、会長には阿部充家の名が載っている。開催期間は共進会と同じく九月一日から一〇月三十一日までを会期とし、毎日申報社を会場とした。共進会

会場の近くで開かれた家庭博覧会は、共進会を賑わせるための別館のような役割を果たした。入場料は一人一〇銭、子ども五銭、日曜や祭日はその倍額、五歳未満は無料、五〇名以上の団体に対しては割引の特典を付した。また、毎日申報社建物敷地の全部を使用、第一号館から第五号館にいたる陳列館の外に別館、庭園、遊興場などを設置するという大がかりなものであった。

『毎日申報』と『京城日報』は、「家庭博覧会」欄を設けて連日共進会と共に家庭博覧会の準備過程を報道していく。そんななか九月二日の『京城日報』に、「すべり山にでんでん太鼓——巖谷小波伯父さんの新発明」という記事が掲載される。記事には、子どもの衛生に関するものを展示した五号陳列館にある家庭病室の館外の娯楽場に置いた遊戯が紹介されている。

坊ちゃん嬢ちゃん方の大歓迎を受けること請合の例の巖谷小波小父さんが考案したところの、でんでん太鼓とすべり山は同じく娯楽場内の庭園に出来る揺動団木、安全ブランなどと共に拵らへて居ます。すべり山は力チ力チ山と言ったお伽噺から来たものでありますがよく内地の神社の階段などに行きますと階段の両隅を子供がすべり落ちるので長い間にその真中が窪みになって居るのを見るところから考案されたもので中々面白いものです。でんでん太鼓は紅白の布を巻いた長い丸太の上に自由に回転する豆太鼓式の

大太鼓をつけて、それが下から動かすたびに空の間で高い音を立てるのです。朝鮮では初めてのものであり、恐らく大歓迎を受ける事だろうと思ひます⁽¹⁰⁾。

午年生まれの小波は馬が大好きで、一九一八(大正七年)二月に過去一〇余年間にわたって収集した馬に関する器物、挿画、玩具などを展示した千里閣を建てて、震災で被災するまで毎週日曜日一般公開していた話は有名である。しかし、小波が「でんでん太鼓」と「すべり山」という遊戯を発明したという記録は新しい。ちなみに「でんでん太鼓」とは、『幼年世界』第七卷第七号と第八号に掲載されたお伽噺の題名である。家庭博覧会が行われる二年前に朝鮮で日本人による口演童話をスタートさせておきながら、博覧会には直接参加しなかつた小波は、朝鮮の子どもに「朝鮮では初めてのもの」となる遊戯を贈っていたということになる。「でんでん太鼓」は大変な人気を集めた。家庭博覧会を訪れた李公殿下の令息龍吉、聖吉も「でんでん太鼓」を一番に気に入っていたという⁽¹¹⁾。

小波が贈った遊戯まで揃え、一九一五(大正四年)九月一日正午、家庭博覧会は幕を開けた。それは、正門上の音楽室に設置された自動オーケストラによる君が代演奏を伴った開会となり、音楽室からは壮快な各種の進行曲を奏して観覧者を送迎するというものであった。また、一時半になると高い塔上から数百個の青や赤の風船が一斉に飛ばされた。風船に下げた紙には景品がついていた。その景品とは、京城南大門通りに位置した

高杉醬油店京城出張所が提供したものであった。⁽¹²⁾ 開会日から、「歓声の巷よ」「歓声楼に満つ盛なる家庭博覧会」「戦場のような大騒ぎ」「何所も目の廻る忙しさ」などの見出しが新聞を飾るようになった。

一方、共進会と家庭博覧会の真最中であつた一九一五(大正四年)一月九日午後二時、京城ホテルでは東洋協会が主催した通俗講演会が開催された。この通俗講演会では、法学博士山田三郎の「同化政策の第一義」と題する講演があつた。山田三郎は、「日本の植民地政策は自ら他の列国とは事情を異にするものあり殊に朝鮮の如き一衣帯水本国と近接し且つ均しく同一の国民たる處に在りては同化政策は統治の第一義なる所以を細説し我が国民性の欠陥を指摘し今や我国の政治社会と言わず経済社会と言わず欠陥の夥しきの時他を導かんとするには先ず自らを導くを要す」と、一時間にわたつて熱く説いたと『京城日報』は伝えている。山田三郎の講演が終わつた後、小松原英太郎會長の挨拶を兼ねた講演があり、通俗講演会は四時に散会した。京城日報社の監督徳富蘇峰の講演も予定していたが、時間の都合によつて中止された。この通俗講演会の性格や東洋協会が推進していた事業について、『京城日報』は次のように伝える。

東洋協会の通俗講演会は今後各地に催し我國民殊に一般青年の爲めに植民思想を喚起せしめ進んで植民事業に尽力し帝國經濟の發展を図り國運の伸張に貢献すべき元氣を作興する爲めに成るべく一般に我が植民地の事情を周知せしむ

る事とし今回朝鮮大共進会開催を機とし久留島武彦氏を特派して朝鮮に於いて幻燈映画の材料を収集せしめ今後朝鮮の現状を大に内地人に紹介する筈なり

この記事は、資料収集のために久留島が東洋協会から派遣されたことをも伝えている。久留島が朝鮮に来た目的については、『京城日報』に掲載された久留島自らが書いた文章にも言及されている。一九一五(大正四年)一月九日と一〇日、『京城日報』の夕刊には二日連続で「文部省囑託・教育事務囑託、久留島武彦氏談」という肩書きよる論が掲載された。一〇月九日には「家庭博は私の理想」、そして一〇月一〇日には「危険に暴露せる現代少女」という題である。朝鮮に来た目的を「家庭博は私の理想」として次のように述べる。

生た朝鮮紹介今度朝鮮に来たのは東洋協会朝鮮支部総会に出席勞々同協会の囑託による朝鮮各方面の事情を調査するかたわら京城に五六日滞在。それから群山木浦方面の調査に向ふ予定であります。私の調査は一般の統計表的の調査を避け成るべく實際に就て詳細に生きた調査を遂げ多くの写真なども蒐集し又は私自からも撮影して帰り度いと考へて居る、と云ふのは東洋協会では台湾朝鮮などの殖民地実況を幻燈とし活動写真として内地各地方に巡回講演を爲し中学校商工業学校其他専門学校を卒業して実業に就かんとする青年をして此の方面に心を向はしむる様に計画して居

るので私の調査も要するに此等講演の材料蒐集を目的として居るのであります。

久留島が朝鮮に來た理由は、東洋協会朝鮮支部総会に出席するためであり、また同協会の囑託による調査を行うためでもあった。この期間中、京城には景福宮での共進会と共に毎日申報社・京城日報社の家庭博覧会が開かれており、仁川では水族館までオープンしていた。共進会の開催時期に合わせて集中的にこのような行事が開催されたのは、言うまでもなく人々の注目を集めて少しでも多くの観覧客を誘致するためであった。共進会を開催した朝鮮総督府は、政治宣伝を極大化するために、この期間中に各種の大会も開催するように措置していたのである。

三 久留島武彦の初朝鮮口演

一九一五(大正四)年一〇月九日土曜日午後二時、京城ホテルで開かれた東洋協会主催の通俗講演会に久留島の姿があった。午後四時講演会が終わった後、久留島は家庭博覧会を観覧するために、会場となった毎日申報社に足を運んだ。当日は会場の後庭で家庭講演会が予定されており、仁川小学校の生徒が講演を聞くために來館していた。そこに久留島が現れたのである。家庭博覧会の関係者はさっそく久留島に口演を申し込んだ。すると、「仁川は十年前私が鉄砲を担いで居た時分初めて上陸し

た記念の土地でしてその子供衆が見えて居る事だから突然だがお話をせう」⁽⁴⁾と、久留島は快く承諾した。

ここで、鉄砲を担いで仁川に初めて上陸したという久留島の「十年前」に遡り、その足跡を簡略にまとめておく。一九〇三(明治三六)年一〇月、東京中央新聞社に勤めていた久留島は、日露戦争を目前に新聞社の社長から韓国の京城への特派員を命じられる。しかし、後備の兵籍があったため、召集されたら即時応召ができないという理由で京城行きを諦める。その代わりに、佐世保軍港の特派員として一九〇三(明治三六)年の一二月末、佐世保に派遣される。佐世保で新年の艦隊遙拝式を見守った後、一旦東京の本社に戻るが、一月二二日、本社からの電令で舞鶴港に向かう。二月、取材のために滞在していた対馬市美津島町竹敷で日露戦争の動員令を受ける。東京の自宅に帰る余裕もなく、召集令状を受け取った翌朝(一九〇四年二月五日)、竹敷から召集地の小倉まで直行する。

久留島は、第一二師団三三連隊兵站幹部の糧餉部へ配属され、門司港から乗船し韓国の仁川港に上陸、濟物浦の糧秣倉庫で働くことになる。一九〇五(明治三八)年五月、司令部の命令で混成施団の北韓軍に配属されて北上、咸鏡北道の富寧に滞在する。八月三日富寧を発ち、三十一日に芽山嶺を越えて須峰洞に進入する。昌斗嶺戦を皮切りに五峯山、鳳儀山での激戦のあげく会寧を占領し、休戦に入る。九月は圖們江畔子仁洞に滞在。一〇月滿州に入って遼陽に滞陣、沙河に進んで駐屯している際休戦を迎え、一九〇五(明治三八)年一月一五日に帰還する。久留

島が朝鮮半島で過ごした期間は、一九〇四(明治三十七年)二月から一九〇五(明治三十八年)九月までのおよそ二〇ヶ月であった。

仁川で一ヶ月、咸鏡北道で五ヶ月滞在した。

一〇年前、一五ヶ月も過ごした仁川は、久留島にとつて「記念の土地」となった。その「記念の土地」仁川から来た小学校生徒に会うために、一九一五(大正四)年一〇月九日夜七時、久留島は家庭博覧会の後庭で開催された家庭講演会に向かった。

後庭に設けられた演壇の上で、京城日報社の監督徳富蘇峰が久留島を紹介した。仁川小学校の生徒を含め、集まつた大勢の観客は手を叩いて久留島を迎えた。『京城日報』の記事から口演会の様子が窺える。

前に並んだ仁川の小学生は云はずもあれお父さんやお母さんに連れられた坊ちやん嬢ちやんは可愛い手を叩いて久留島先生を歓迎する。今後の久留島先生のお伽噺は何れ機会を見まして紙上で御紹介します。大体をかい摘むと馬と犬と猫と人間の年のお噺で先生のはつきりした口調で面白くお話になるのでから生徒の喜びは譬く。内地からも多数の出品位で面白い時に我れを忘れて小さな手で喝采をする、先生のお伽噺は面白い内に教育と云ふ事を含んで居ますからお終ひには馬や犬や猫の取締りをする人間諸君は今から立派な人間になるのでから勉強せねばなりません、と面白い内に自然に励まされて小供衆は大喜びでした⁽⁵⁾

この日久留島が口演した「馬と犬と猫と人間の年のお噺」と関連して、「面白い事実がある。それは、およそ一〇年後のことである。一九二二(大正一十一年)六月二四日から七月一四日まで二〇日間、巖谷小波が朝鮮半島の二〇ヶ所を巡回し、六〇回のお伽講演会を開催した。小波が帰国してから四ヶ月経つた一月二五日から、『毎日申報』紙上には「日曜附録婦人と家庭」欄が設けられ、小波の童話が掲載される。一月二五日から掲載された小波の童話は、一九二四(大正一十三年)三月三〇日まで、およそ一五回にわたつて全一篇が紹介された。その一篇のなかに、「人間と寿命」と題する童話がある。以下は「人間と寿命」の全文である。

この世界が出来たばかりの頃の話である。世界を治めていた神様が、人間、馬、犬、猿を集めて、みんなの寿命を決めることにした。最初に出てきたロバに、三十年がどうだと聞いてみた。ロバは、朝から晩まで人間に引っぱられ使われているのが大変だから三十年は長すぎるという。神様はロバに二十年の寿命を与えた。次に出てきた犬にも三十年を提案するが、犬は一日中ほつき回るので三十年はきついなといひ、神様は犬の寿命を十年に決めた。その次の猿には、君は働くこともなく森の中に引き籠っているから三十年でどうだと聞くと、猿は毎日人間につられて躍りや、可愛いしぐさを演じているため、三十年は大変だと答え、

十年の寿命を与えられた。しかし、一番後に出てきた人間は、他の動物とは違つて三十年は足りないと言ひ張る。それで神様は、三十年にロバと犬と猿の年を合わせた七十年の寿命を与えた。こんなわけで、人間は、三十歳までが一番楽で、その次からはロバのように働き、またその次からは犬のようにあつちこつちを歩き回つたり、猿のように片隅に引き籠つたりする。そして、またその次は、完全に年をとつてしまひ、子どものようになしぐさをするようになるが、これはもうろくすること、まるで猿がしぐさをするようなものである。⁽⁶⁾

最後に登場する動物が猫と猿という違いはあるものの、久留島が家庭講演会で口演した「馬と犬と猫と人間の年のお断」とは、上記の「人間と寿命」と同様の童話だつたことが察せられる。久留島が朝鮮口演において猿の代わりに猫を登場させたのは、猿が住んでいないため猿を知らない朝鮮にいる子どもへの配慮があつたためと考えられる。久留島の口演が終わつた後、綱島佳吉の「円満なる家庭」という講演が一時ほどあり、家庭講演会は閉会した。京城における第一回目の久留島の口演を盛会に終えた京城日報社は、さつそく「十、十一の両日家庭博にて久留島先生のお伽講演があります」という広告をかけ、観客を呼び寄せる次のような記事を掲載する。

尾上新兵衛さんと云へばお伽断で坊ちやん嬢ちやん方が久

しい以前からのお馴染みでせう、その尾上新兵衛さんの久留島武彦先生は今度東洋協会調査部の囑托を受けられて入京せられました、此機会に於て京城の坊ちやんや嬢ちやん方のために十、十一の両日午後四時から家庭博の後庭で先生のお伽講演をお願ひすることになりました、直ぐ昔断を連想しますが久留島先生のは総てが家庭教育を土台としたものと乃木大将の幼年時代など聴いて面白く而も其れが直ぐ為めになる断許りでありまた日本に居ても滅多に聞く事の出来ぬ講演ですから坊ちやん嬢ちやんは此機会を脱さず御聞きにお出で下さい⁽⁷⁾

一〇月一〇日、家庭博覧会会場の後庭で第二回目の口演が開かれた。口演会当日、会場はいつもに増して「朝から人出は実にあつたもの」⁽⁸⁾となつた。口演開始前の会場の様子は、「南大門と西大門の両小学校の生徒方は大勢で三時前、大人がまだ変装美人探し⁽⁹⁾で大騒ぎをして居る頃から詰め掛けて、『久留島先生は何の方だろう』と夫れは夫れは大変なお待ち兼ね、渡辺高等法院長は嬢ちゃんを連れて来て居られる。西大門小学校の横山校長先生その他大人の人も沢山集まつて、首を長くして待つて居た」⁽¹⁰⁾。午後四時、京城日報社の営業局長川島喜彙の紹介で、「満場破るが如き喝采を受けて」久留島が後庭の真中に設けられた演壇に立つた。予告された通り、この口演では乃木將軍の幼い時のご話が語られた。次の引用は、『京城日報』が一日の夕刊に大きく掲載した、久留島の口演を速記したものである。

『梅檀は二葉より香ばし』と云う古語があるが植物学者の話によると梅檀と云ふ樹は決して二葉より香を持つて居るものではない。その樹が大きくなるに従つて香りが次第に強くなるのである。昔は偉い人は子供の内から偉らかつた様に伝えられて居るが、今日の人は小さい時から賢くなくてもよいのだ。例えば彼の乃木將軍の如き、武威赫々、今日では神と崇められる程の人でも幼い時には凡様のない弱虫であつたのだ。恐らく將軍の子供の時程▲よく泣いた泣虫は無つたであらう朝から昼まで泣いてお昼から晩まで又泣くと云ふ弱虫の臆病な子供でありました。育つに従つて段々弱虫となり、又大の寒がり、背中を丸くして常時も火鉢の傍にうづくまつて居た。七つの時に手習ひに行く途中雪が降ると云つては泣き十歳になつても戦争ごつごなど活発な遊びは大の嫌いであつた。乃木將軍の弟さんに真心と云ふ方があつた。この人も幼い時には兄に似て大の弱虫で近所の子供等が戦争ゴツゴツをして遊ぶ時には▲常時逃げた家中に隠れて居たものだ。其処で近所の子供等は將軍の幼名を無人と云つたものだから泣人と呼び替えて『乃木兄弟真心に泣人』と大きな声で怒鳴つて歩いたものだ。この弱虫の泣虫が何うして後には難攻不落と称せられた旅順を陥落せしめた大將軍となつたであろう。当時の乃木家の住宅は見る蔭もない荒屋であつた。冬の寒い風は玄關から座敷まで吹き放しであつた。併し刀と鎧だけは実に立派な

ものが飾られてあつた。無人さんの敵父は▲恐ろしい早起きの人であつた。無人さんは朝起きると直ぐ裏手の井戸傍に行つて顔を洗ふのが例となつて居た。井戸の上には土塀が跨つて居て隣の毛利家でも使ふ事の出来る様になつて居た。或冬の朝無人さんが其井戸に顔を洗ひに行くと霜が降つて居て真白くなつて居る。弱虫の無人さんは尻込みをして水を汲うとも為れない、時しも敵父の声で座敷から無人さんと呼ぶのが聞こえる。無人さんは叱かれてはたまらぬとソコソコに洗つて座敷に出て恐る々々敵父の前にかしまつた。無人さんの敵父は一言も小言をおつしやらない、今から外に出るから袴を着けると云はれる、無人さんは支度をして冬の寒い朝の六時といふに敵父に連れられて家を出た。お父さんは馬鹿に威勢のよい人で寒い時でも肩で風を切つて歩く人であつた。併し弱虫の無人さんは▲そんな元氣は露程もない身を切る様な寒い風の吹く海辺に沿つた道を行く事十二三町、とある寺の山門に着いた。山門に入つて真直ぐに行けば本堂に行くのだが敵父は左の方に足を運ばれて杉の下の木の下にあるアノ墓に詣るのだとおつしやる。無人さんはここが泉岳寺であると云ふ事を知らない。墓まで行く途中に井戸がある。水深が浅いため井水は凍つて居る。無人さんはこんな所で手を洗はなくてもよいと思つて居るのに敵父はここで手を清めて行こうとお仰せになる。この井戸こそは吉良殿のみ首を洗ふた〓有名な首洗の井戸である〓頃は元禄十五年の昔、今日は恰も師走の十五

日だ。四十七義士が吉良邸に乱入して目出度く▲吉良殿の御首を田蔵した日である。この首級のために義士は親に別れ、子に別れ、艱難辛苦の限りを尽くしたのだ。■敵父と無人さんとはこの井戸で手を清めて四十七義士のお墓に参詣した。第一番にあるのが大石義良雄の墓だ。二番目にあるのが主税さんの墓だ。主税はその時十五であつた。お前はここの歳十一だから、モ一四年の後に主税さんの如く働きが出来るかと敵父は無人さんに問はれた。無人さんには無論その答えの出来そうな筈はない。▲今度は四番目の墓を指されて、アノ字は何んと読む「間です」「違つ」「間」イヤあれは間と読むのだ。その次は誰だ「武林」次は倉橋十番目が小野寺、この十人の義士はお前が毎日顔を洗ふ自家の井戸で顔を洗はれたのだ。アノ井戸は半分は毛利家で使ふて居るだろう。元禄の昔其十義士は毛利家にお預けとなつて居たその当時十義士は毎朝アノ井戸で顔を洗はれたのである。お前はこれから顔を洗ふ時には自分の顔を洗ふと思はず義士の顔を洗ふと思へ、霜で白くなつた竿は義心の箆つた槍だと思へ、重い釣瓶は吉良殿の御首だと思つて引き揚げよ。今日は義士の面々で明朝からは貴公方のお顔を洗はして戴くとよくお辞儀をして行くのだ。俺も一緒にお願いをする。と敵父は墓前に跪いて「倅が明朝から貴公方の御顔を洗はして頂きますから何卒宜しくお願い申す」と生ける人に物言ふ如く敬しく礼をして帰られた。無人さんは▲その翌朝から井戸に出て顔を洗う時には泉岳寺の義士の

墓前で教はつた父の教訓を想ひ出したが冬の朝の井戸辺は依然寒い。無人さんは冷めたい義士の槍だなど云ひながら竿を握り、重たい吉良殿のお首だなど云つては釣瓶を揚げ、これが間さんの顔だ、お次が武林さんお次が誰だと十人分十遍も冷水で顔を洗ふとモ一顔から湯気が立つ程温かくなつた。ついでに自分の分もだと更に幾度も幾度も顔を洗ふた。コーなると元気が出来て来る。座敷に居られた敵父がお呼びになると無人さんは思はず「ハイ」と大きな声の返事が出た。無人さんはこのようにしてその敵父から教育されてついに「今まででは勝れし人と思ひしに人と生れし神にぞありける」とまで敬はれる程の人となつた。少年諸君は今日より明日と少しづつ勤めてやまなければ偉い人となる事が出来るのである。⁽²¹⁾

引き続き翌日の一日も久留島の口演会が予定され、

十一日も矢張り午後四時から開演され先生は「二典の角力火鉢」と云ふ乃木將軍の勇ましい教育的のお話を為て貰ふ事になつて居りますから生徒の方は勿論大人の方も是非御越しく下さい。⁽²²⁾

という広告の記事が『京城日報』に載せられた。しかし雨によつて中止されてしまい、京城における久留島の第三回目の口演会は一二日に開かれるようになった。一二日の口演会当日、家

庭博覧会の後庭には南大門、日の出、鐘路、桜井、元町の五つの小学校から二〇〇〇人を超える児童が詰めかけてきた。「前夜の秋雨名残りなく晴れて清々しい上天気に恰の裾捌きも軽く朝の十時頃から婦人連れの入場者相接ぎ午後となれば久留島先生のお伽講演がみつたので鐘路、桜井其他の小学生徒が午後二時頃から来場したので此日の午後は恰も小供デーの如うに小学生で身動きもならぬ」⁽²³⁾賑わいであつた。驚くほど大勢の子どもに囲まれて話を語っている久留島の姿をおさめた一枚の写真から、その日の熱気が感じ取れる。

二〇〇〇名を超える聴衆の前に、「二典の角力火鉢」と題した久留島の口演が始まつた。

幼い時弱虫であつた乃木大将は厳格なお父さんに教育されてアノ様に偉い人となられた。乃木大将も亦自分のお子さんの勝希、保典と云ふ二人の教育は頗る厳格にせられた。

大将は狭まるしい六畳の間を自分の部屋とし、日差しのよい隣の八畳の間をお兄さん達の勉強室に当てられて昼も夜も御自分で監督して居られた。大将の家では冬中火鉢を使ふ事がない。女中と馬丁の部屋には火鉢を当てられて居たが大将の部屋は無論の事夫人の部屋にもお兄さん方の勉強室にも一切火鉢を入れない。冬の寒い冷たい日には勝典保典の御兄弟は随分とお困りになつたものだ。大将は自分達は火気をお取りにならぬが、客人のあつた時には火鉢を出される。客人が帰られた後で女中が大将に知れぬ様一寸

の間お兄さん達に手を焙らせる事が稀れにはあつた。極く寒い冬の或る日の事、兄さんの勝典さんは読み方、弟の保典さんは綴り方の勉強をして居られたが、屋外に吹く寒風は障子の隙間から入つてきて硯の水も凍つてしまふと云ふ冷たさ。兄弟二人はガタガタした。その様子を見て居られた大将は唐突に「勝典！保典！」とお呼びになつた。二人は叱られるのだと思つてびくびくもので大将のお部屋に入つて両手をついた。所が大将は存外に御機嫌がよい。ここにこせられて「寒いだらう！」と御仰せになる兄弟は寒いと云つたら叱られると思つて「イヤ寒くはありません」と威勢よくお答えをすると大将は、「嘘を云へ、寒いのだらう。寒くないと云はんでよい。寒いのは寒いので之れに打ち勝つ心得が肝要なのだ。父も今日の寒さは余程身に染む様だ。お前達も火鉢を出してあたつたら好からう」とおっしゃる。常時に似せない父の言葉に兄弟は珍しい事だと忸々してどんな火鉢を出して下さるのだらうと思つて居ると「勝典、子供の時に貰つた火鉢はドーした」と云はれる勝典さん。愈々解らない「火鉢なんて貰つた事がないのに妙な事をおっしゃるものだ」と兄弟で顔を見合せていると、大将は「お前達が出さなければ俺が出して焙らせてやらう」と云いながら、部屋の真中にすつと立ち上がり「二人共ここへ来い」と兄弟は向かい合ひに膝を突き合はして座はらせられた。ここで座り相撲を取るのだ「保典！兄に遠慮することは要らないから精一杯にやれ」兄弟はまるで狐に魅

まれた様に、火鉢の話がいつの間にもやら相撲になつてしまつた、と思つたが仕方がない。元來活発な兄弟は激しく相撲した。上になり下になり捻るぢつ捻ぢられつ、ドタンバタンとそれはそれは大変な大相撲、行司役の大将はなかなか軍配をお上げにならない。兄弟はモ―火鉢の事を忘れ夢中になつて相撲つて居たが、次第に息が切れて来る。「兄さん羽織を脱ぐから一寸待つて下さい」と保典さんが羽織を脱げば兄さんも脱ぐ。ついには立ち相撲となり着物まで脱ぐと云う勢い、乃木家では和服の時は冬の寒い日でも袴と襦袢だけであつた。兄弟二人は襦袢の上に帯を締めて相撲ふて居たが兄さんの勝典さんの力が強かりけん弟さんは見事に投げ付けられた。投げられて襖の角で頭を打つた保典さんは額を玉なす汗を手で拭いている。大将はにっことせられて其が頭の火鉢だとかおっしゃる。勝典さんは胸から腹から一面に流れる汗を手で掬う様にしてふいて居ると大将は「ドーダ勝典！お前にやつた臍火鉢が之れだ。温かくなつたであらう。寒い時には時々二人でこの火鉢を大きくしたり小さくしたり随意に出して焙るがよからう」とおっしゃつて此の日は終んだ。それから後、ある日の事。ご親類の馬場機関中佐が訪問された。乃木大将の取次役は当時夫人がせられる。乃木家の家風を知っている中佐は直ぐ帰る心算で、それには及ばせぬと火鉢を断つておいた。それではといつて大将と中佐とは火鉢なしで対談して居られた。色々と話が長くなつて直ぐ帰るつもりのが三十分に

もなつた。そう長くなると火鉢なしでは寒くて堪らない。併し一旦断つた火鉢を今更出してくれとは軍人として云えない。辞して帰ろうと思つても大将の話はなかなか途切れないので心中頗る困つて居ると、隣の部屋で「少し寒いから臍火鉢を出さうか」と云う話声が聞こえたので馬場中佐はお兄さん達が氣を利かして臍の付いた火鉢でも出して呉れるのだと思つて内々喜んで居た。所が火鉢は一向に出て来ないで隣の部屋でドタンバタンと大騒動が始まる。中佐は余程大きな火鉢だと思つて居ると、エイと一声の唸り声が聞こえた途端、ドタンとばかり人の倒れた音と同時に唐紙が倒れて赤裸の子供が飛び出した。中佐は心配で堪らない。御兄弟が火鉢を運ぶ途中両側に付いて居た臍が取れて火鉢を打ちあげたのであろうと思つて、大将に「灰が溢れはしませぬか」と問うた。大将はニコニコせられて「アレは火も灰も入つて居ない。子供等の臍火鉢だから心配はない」とその由来を中佐に説かれた。これを聞いた馬場中佐は誠に結構な御教訓を伺いました。私の子供等にも此結構な臍火鉢を与える事にしませうとあつあつ礼を述べて帰り、直ぐ玄関にお迎えに出た四郎さんと云ふお子さんに此臍火鉢をおやりになつたと云ふお話を私は馬場さんから聞きました。私は又ここにお集まりになつた小学生徒諸君に此臍火鉢をお上げするのである。此火鉢は臍には限りません。手の先からでも足からでも出るのである。自分の持つて居る力を出して働けと云う事である。自分の持つて居る

大和魂を出して働くのである。⁽⁴⁾

久留島は「流暢な軽い口調で話されるのであるから小学生諸君の喜びは大したもののが面白くなると我れを忘れて喝采」し、盛況裡に口演会は幕を閉じた。その日の夜、日の出小学校の母子会における講演会を最後に、京城での日程は終了した。一〇月八日の夜京城に到着した久留島は、一三日の朝京城を立つまでの四日間の滞在中、雨で中止された一日を除いて三日間連続で口演会を開いていた。久留島が京城をたつた二三日、『京城日報』は「久留島先生の底力のある声は隅から隅まで徹り一人も聴き洩すものなく京城未曾有の子供会であつた」と久留島の口演会を振り返っている。

久留島の口演は、京城に留まらず次の目的地である群山でも、またその次の木浦や釜山でも続いた。その足取りをたどってみると、一〇月一三日の朝、久留島は湖南線方面の列車に身を載せて京城を離れた。京城日報社の営業局長川島喜彙と湖南日報の主幹川島勝を同伴して、一四日午後群山に到着する。偶然にも大学教授の岸上理學博士と同じ列車であつた。群山の停車場には天野府尹を含めた多数の人々の出迎えが待っていた。久留島一行は谷口旅館に入り荷物を下ろした。群山の官民及び有志は久留島と岸上という両名士が同時に群山を訪問したことを記念して、当土亭に二人を招待し盛大な歓迎会を催す準備に着手した。しかし出席を懇請したところ、久留島は旅行の疲労と当夜口演会を控えているため暫時休養したいという理由から歓迎

会への出席を固辞した。群山教育会主催の口演会開会予定時刻である夜八時になると、会場となった群山小学校の大講堂は溢れるばかりの盛況を呈していた。山本校長による開会の辞の後、京城日報社の営業局長川島喜彙の挨拶と紹介を受けて久留島が登壇した。「氏独特軽妙にして力溢れる口演一時間余に亘り講堂の聴衆は酔えるが如く講演終了」⁽⁵⁾、午後一〇時になって散会した。群山小学校の懇請により、翌一五日の午前九時から同会場で口演会が設けられ、群山小学校尋常科三年以上の生徒五〇〇余名が集まつた。およそ一時間に及んだ口演会を終了した久留島は、群山の市街要所を一時間ほど視察し、多くの人の見送りをうけながら一四時四五分発の列車で全州に向かつて出発した。

全州を視察した後、その日のうちに木浦に向かい、木浦に着いたのが一五日午後一〇時である。翌日からはまた口演会が開催された。一六日の午前中、木浦公立小学校生徒に口演、午後七時には、木浦教育会及び京城日報木浦支局の発起によつて、木浦公立小学校の講堂で「主婦の責任」と題した家庭教育に関する話を約三時間にわたつて行つた。この講演会について『京城日報』は、「聴講者無慮千数百名にして木浦未曾有の盛会なりし其の巧妙にして熱誠なる家庭教育講話は聴講者に多大なる印象を与へたり」と伝える。講演会が終了した後、木浦ホテルで盛大な歓迎会が催された。翌一七日、久留島は川島営業局長と共に朝一番の列車で大田に向け出発した。そこからの久留島の足跡に関する記録は見つからず、大田を視察した後釜山を経

由して日本に帰つたと推測される。

四 久留島武彦の口演とその後

朝鮮総督府が植民地統治の成果を広報するために開催した「始政五年記念朝鮮物産共進会」と共に、京城日報社と毎日申報社が主催した家庭博覧会が一九一五(大正四)年九月一日から一〇月三十一日まで大に行われた。家庭博覧会は観覧客を誘致するために、景品をかけた風船を飛ばしたり、子ども以外の入場者に対して廣江商会の「しらぎ」を一つずつプレゼントしたり、また入場者に紙巻き煙草を一円に二つ提供したり、色んな工夫を重ねていた。景品をかけた「変装美人探し」は、大好評だったため第二回目が企画される程であった。景品をかけた催し以外は、家庭講演会が五回にわたって行われた。その中で、久留島による「お伽講演会」以外はすべて大人を対象にした講演であった。つまり、久留島の訪問がなかったとしたら、家庭博覧会における子ども対象の催し物はなかったとも言えるのである。『京城日報』は、盛況を成した久留島の口演会に対して「京城未曾有の子供会であつた」と伝えている。当時、朝鮮における「子供会」に対する認識は、果たしてどの程度のものであつたのだろうか。当時朝鮮にいる「子ども」は、どのような存在として見られていたのか。「子ども」に対する認識、すなわち、「子ども観」はどの程度定着されていたのだろうか。

答えの糸口を見出すために、一九一〇(明治四三年、久留島

が『家庭』(第二卷一、一九一〇年一月一日)に寄稿した「朝鮮の子供」という文を読み返してみたい。そこには、日露戦争に従軍した際韓国の仁川に上陸した久留島が、初めて朝鮮の児童に触れた時の体験が綴られている。その体験のもと、久留島が受け止めた朝鮮の児童観が語られている。久留島は朝鮮の児童について、次のように語る。「日本で子供といふ言葉はいつも邪気の無い所に」使われる。「心身共に天使に近い美しきの形容」で、「尊敬、親しみの意味」に用いられているが、朝鮮の子供という言葉、「チヨンガー」といふ其音が彼等の耳に如何に侮蔑、卑賤の意味を伝ふるかは想像の外である。殆ど人非人、人外人といふ意味に呼ばれて居る」。また、朝鮮では大人と子供を区別する基準が、年齢差や発育の順序ではなく、頭髮の上げ下げ、つまり妻の有無によると述べる久留島は、「奇々怪々、世界に未だ斯の如きものはない」と、驚きを表している。

さらに、日韓併合に至つた「韓国衰亡」の最も大きな原因を、「韓国の家庭、特に子供に対する解釈」にあると語っているのである。久留島は指摘する。朝鮮の児童は楽しみの道具といえるものを多く持つていない上に、遊戯も数が少ない。また、その数の少ない遊戯ですら、楽しんでる姿を見かけることはごく稀であつたと回想する。それは、朝鮮には「子供といふ觀念が卑しめられ」ており、「十歳のネンガミは凧上げに忙しい時内房に妻あり彼れは既に「一国民也」という現状に因るというのである。やがて久留島は、「韓国民は人といふ見解を根本から誤つてしまつた」という見解を示した。

ここで、久留島が朝鮮における児童概念の欠乏を指摘してから五年が経過した一九一五(大正四年)、共進会が開催した「婦人小供デー」の様子を概観してみたい。「小供」という用語が用いられたところから、また「子供」という言葉すら定着していなかった当時の状況が窺える。「婦人小供デー」と定められた一〇月一七日に入場した婦人と子どもには、それぞれプレゼントがあった。婦人には化粧品入りのトランクが一個と子どもにはクラブ紙鯉と絵はがきが与えられた。もう一つ目玉企画となったのは、慶会楼の階下を全部開放して婦人と子どもの専用休憩所にしたことであった。婦人子ども専用の休憩所の中央には音楽隊が配置されて絶えず音楽を演奏し、その上お茶とお菓子が出された。また、娯楽場におかれたブランコが子ども専用として無料提供された。当日の午前中には「褒賞授与式」があり、昼には演芸館において無料で婦人と子どものための公演が各一回ずつ開かれた。この公演には、天勝一行による芝居、少女ダンス、「滑稽奇術」が舞台にあげられた。翌日『京城日報』は、「会場内は後から後からと波打つ群衆に賑わった。婦人小供デー大成功」と報道する。

内外法の伝統がまだ残っていた当時、婦人と子どもを会場に足を運ばせるために企画された「婦人小供デー」は、知らない男女が同じ場所にいることに対して偏見が残っていて外出が自由ではなかった当時の婦人に対する、近代文物の現場への誘導となった。かつて一九〇七(明治四〇)年に開かれた京城博覧会の際にも、「婦人の日」が三回開催されて大きな反響を呼んだ

ことがあった。しかし「婦人小供デー」は、対象を婦人と子ども層に限定したということ以外は、他の催し物と特別な差異を見せないものであった。大人と子どもに見せる公演の内容にも差が見えない。つまり、また朝鮮の子どもは市民権を得ることが出来ず、ただ単に大人や婦人と区別する存在くらいでしかなかったのである。

家庭博覧会が行われた時点の朝鮮の状況をみると、『少年』を皮切りに、『赤い上着』『子供の読み物』などを通して児童文芸物を試みた崔南善の努力があったが、それすら『セツピョル』の終刊(一九一五年一月)をもって途切れてしまった。すなわち、一九一〇年代の朝鮮半島は、児童に対する認識が定着していなかったために、児童文芸物なるもののつぼみを咲かせることができなかつた。換言すると、児童に対する認識及び児童文芸が芽生えるすぐ手前に置かれていた時期だったのである。

一〇年ぶりに朝鮮半島に渡った久留島が、家庭博覧会を観覧したついでに口演会を開き、「京城未曾有の子供会になった」という評価を残して日本に帰ったのは一九一五(大正四年)一〇月のことであった。その二年後一九一七(大正六年)六月一〇日の朝には、大井冷光が釜山に足を踏み入れていた。久留島の紹介で時事新報社に入社し働く傍ら、雑誌『少年』『少女』の記者としても活動していた冷光は、久留島に勧められて個人的な満鮮旅行に出かけたのである。満州から京城に帰る汽車の中で「大連富来洋行」の森上卯平に偶然出会うが、森上卯平は京城日報社に電報を打ち、冷光の入城を知らせる。電報を受け取っ

た京城日報社は、直ちに「お伽話大会」を準備し、冷光が京城に降りると休む間もなく会場に案内する。このように積極的な態度で口演会を進めていた京城日報社は、同年三月五日から初めて「オトギバナシ」欄を設け、毎月曜日に童話を掲載していた。つまり、冷光が朝鮮を訪れた一九一七(大正六年)は、『京城日報』において児童文芸物をスタートさせた時期であった。『京城日報』が「オトギバナシ」欄を通して毎週「お伽噺」を届けていた一九一七(大正六年)には、「お伽噺」を子どもに直接聞かせるために、冷光の後を追って久留島も再び朝鮮を訪ねてくる。次回は引き続き、朝鮮に児童文芸が定着される過程を、久留島を中心とした内地からの「お伽講演会」と、京城日報社による児童文芸活動を通して考察していきたい。

【注記】

1 岸辺福男は自分が日本で初めて口演を試みたと書いているが、口演を広く一般に認められ全国に拡散させた業績や、久留島武彦のような職業的な口演童話家を育成したことなどから、本稿は巖谷小波を口演の先駆者とする説に従う。

2 巖谷小波『我が五十年』(東亜堂、一九二〇年五月)、二九五頁。

3 坪谷善四郎『博文館五十年史』(博文館、一九三七年六月)、一九六頁。

4 谷出千代子『童話の語りに関する史的考察』『童話の語り発達史』(海鳥社、一九九三年二月)、一三〇頁。

5 内山憲尚『日本口演童話史』(文化書房博文社、一九七二年三月)、一三頁。

6 地理的名称としての朝鮮半島に、本稿で扱う時期に存在した国家を、原則として朝鮮と呼ぶ。但し、一八九七(明治三〇)年から一九一〇(明治四三)年までは大韓帝国を略して韓国と表記した。

7 李在徹『韓国現代児童文学史』(二志社、一九七八年一月)、一〇〇頁。(筆者訳)

8 李正錫『オリニ』誌に表れた児童文学の様相研究(全南大学校、一九九三年二月)、二頁。(筆者訳)

9 巖谷小波、前掲書、三三三頁。

10 『京城日報』一九一五年九月二日

11 「李公殿下の令息龍吉、聖吉のお二方が堀場御教育掛主任李王職家教育囑託鄭尚鎬氏他二名の侍女お付き添いで馬車を駆って来場された。御着と同時に遊戯場に成らせられ暫し興せられデンデン太鼓の珍しきにも手を拍ってお喜びになる。『京城日報』一九一五年九月二二日

12 風船に附いている景品は一等醬油「最上」小樽一〇丁三五円、二等一円引五本五円、三等五〇銭引一〇本五円、四等三五銭引一〇〇本三五円、五等二〇銭引八二本三六円四〇銭。九月一・一・二日の両日放揚する外その後、一九・二・二六・一〇月三日・一〇日・一三日・一七日・二四日・三一日の日曜祭日に飛ばすのであるが、この景品総額は千余円に上り、拾った人には拾った日より三〇日以内に景品を南大門通りの出張所で引き換える事になっていた。

13 『京城日報』一九一五年一〇月一〇日

14 『京城日報』一九一五年一〇月一〇日

15 『京城日報』一九一五年一〇月一〇日

16 『毎日申報』一九二四年三月一六日(筆者訳)

17 『京城日報』一九一五年一〇月一〇日

18 『京城日報』一九一五年一〇月一〇日

19 共進会は、一九一五年一〇月一〇日曜日「大宝探し」を企画した。午

前九時三〇分開始で、協賛会事務所の裏から売店の通路を興業場に至る
一帯の地域に、一二等まで二千余点の宝が隠されていた。その賞品は一
等が米一俵に筆筒、二等は布団五枚と鏡台一個、三等はクラブ化粧大箱
三個、四等は鉄瓶、衣装盆、火鉢、陶器などであった。締め切りは午後
二時であった。この企画に加え、家庭博覧会は「変装美人探し」を行っ
た。一〇月一〇日曜日の朝、家庭博覧会の入口にある東亜という売店
で、敷島・武蔵・大和を一つ、朝日を二つ買うと入場が無料となった。

午前は朝日嬢、午後は大和嬢、夜間は敷島嬢という三人の変装美人が会
場に現れ、この美人を捕らえた人に一〇円の懸賞をあげるという企画で

あった。

20 『京城日報』一九一五年一〇月一一日

21 『京城日報』一九一五年一〇月一三日

22 『京城日報』一九一五年一〇月一一日

23 『京城日報』一九一五年一〇月一三日

24 『京城日報』一九一五年一〇月一四日

25 『京城日報』一九一五年一〇月一七日

(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年)